

第41号

発行所
茨城県筑西市下山590
茨城県立下館第一高等学校
紫西同窓会
TEL (0296) 24-6344(代)
FAX (0296) 25-4673
編集兼発行責任者
鯨之
印刷所 戸頃印刷所

紫西会報

北信濃を旅して

紫西同窓会長 中山喜一郎
(三十一回卒)



平成二十二年の十二月に昔ながらの友人七人と「北信濃芸術探訪の旅」に出かけてまいりました。

初日、下館を午前八時に八人乗りのワゴン車で小生の運転で出発。小山駅にて宇都宮からの友と神奈川県平塚からの友を二人乗せて、国道五〇号線を西に向かいました。快調に佐野、足利を過ぎ、大田より高速道路高崎ジャンクションを左へ折れました。当日は、快晴でドライブ日和。妙義山の岩肌を眺めながら軽井沢を過ぎ、途中二箇所ほどトイレ休憩。昼食には、信州そばを食しました。そして最初に訪れたのは長

野郎中野市の中山晋平ミュージアムです。

晋平の ミュージアム前アーチ門 九個のベルが音を奏でる

偉大な作曲家晋平の詞を多く書いたのは我が茨城県ゆかりの野口雨情、そして西條八十人ですが、兩人作詞の歌が何百曲とありこんなに多いのにはびっくり致しました。一つの世もすたれない童謡として多くの名曲があり、館の学芸員の方がコンサートルームで晋平十六歳十八歳まで代用教員をしていた時使用していたオルガンとピアノを交

互に数曲生演奏してくださいました。中でも、我々の要望を聞き入れて我が下館の盆踊り歌「下館音頭」(西條八十作詞・中山晋平作曲)をピアノで演奏してくれたのには感動いたしました。

晋平の コンサートルームピアノ弾く 我がふるさとの盆踊り歌

西條八十と云えば我が母校下館第一高等学校の校歌の作詞者です。どのようないきさ

つで校歌の作詞を依頼されたか存じませんが、戦前の作詞と昭和二十年以後の改定をしていたら、他校には絶対に類を見ない素晴らしい校歌で私のみならず同窓生皆さんが誇りに思っています。また、下館音頭の方は西條八十氏が終戦後大学時代の友人、下館西町の外池格次郎氏を頼って疎開していた時、作詞して頂いた詩で一番より一番迄もある素晴らしい作品です。双方とも時代を越えて歌い続けていくものと信じます。

そしてその後、湯田中温泉郷の一つ上林温泉へと向かい

ました。上林温泉より二キロ程山奥にある地獄谷は野猿が湯につかると云うことで有名な所です。何でも米国ニューヨークのギャラリーでの写真展で、雪降る中猿が温泉にかかる一枚が特選になり今では外国人の観光客が大勢押し寄せています。

地獄谷 二キロ余りの山道で 行き交う人は 異邦人なり

雪模様 野猿の群れが 湯につかり 毛づくろいする ほぼえまし哉

夕方五時ごろ、今夜の宿に到着。旅の疲れを癒すため、大浴場で全身のびのびとくつろぎました。この旅館はもともと長野電鉄の創業者の別荘だったそうで、よく皇族方も宿泊されるところです。旅館のすみずみまで、また仲居さん達のおもてなしまでも奥ゆかしく、懐石料理の味も絶品でした。

昨晩は 雪降るごとく 晴れ渡り 今朝一面の 銀世界なり。

翌朝駐車場に置いた車の屋根に一尺余りの雪が積もっていました。朝九時旅館出発。建築家の黒川紀章さん設計の美術館を見学。光と陰の演出がファンタジックですばらしく感動いたしました。それより栗のお菓子で有名な小布施へと向かいました。そしてかつ葛飾北斎、高井鴻山、中島千波、三館共通入場券を求めゆっくりと芸術美術を堪能致しました。それぞれの美術館展示場世紀を越えて目の保養が出来ました。

美術館 ひと回りして 昼の膳 しゃぶしゃぶ囲み 舌鼓打つ

昼食に食した信州牛の霜降りロースの味は絶品でした。今回の様な旅は正に「たび」。観光業者さん達が企画するような忙しい旅行と違って見たい所を時間をかけてゆっくり見学し、とてもすばらしい旅でした。参加者は下館小学校からの竹馬の友八名(内姫君二名)。私を除く七名の朋友は皆教養人で心の豊かな人ばかりで、私達古稀過ぎた友人が共に元気で旅が出来る幸せを感じました。

一昨年体調を整えるため廃業してから、人間ドックで指摘された身体各部の不調を完治することを目的に、医療機関に通院しつつ、また、毎日一万歩を目標に歩くことにも専念し、六か月で十キロの体重減量に到達することが出来ました。体調が段々改善してきましたので、このような旅行も楽しむことが出来ます。

紫西同窓会の皆さん、高齢

者の方々は自分の趣味を生活したり旅行する等生活をエンジョイしてください。そして若い方達はあらゆる方面で第一線で活躍をしていらっしゃることを存じますが、充分健康に氣をつけて頑張ってください。今後とも紫西同窓会員の皆様の益々の御活躍と御健勝を祈念いたしまして筆をおきます。

本校の更なる発展を願って

校長 宮本 節
(四十五回卒)



本校は大正十一年に創立以来、平成二十二年に学校創立八十七周年を迎えますが、平成二十五年には学校創立九十周年、そして平成三十五年には学校創立一〇〇周年という大きな節目に向けて進んでおります。その折には同窓会、PTAのご協力を賜りたくお願いする次第であります。さて、今年度三学年の進路状況については現在進行中であり、ホームページで随時発

紫西同窓会会員の皆様にはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

皆様には日頃から本校の教育活動に対し、多大なるご理解と温かい励ましをいただき衷心より感謝申し上げる次第でございます。

表していますが、昨春の三学年の入試においては、国公立大合格一一五名(現役一〇五名)、私立大合格は延べ五〇〇名を超える大変すばらしい実績を残しました。

特に近隣の筑波大学(十三名)・茨城大学(三十八名)・宇都宮大学(十九名)・茨城県立医療大学(五名)と、この四大学で七十五名の合格者を出しており、内容も伴っています。また、昨年度の特徴は部活動に所属していた生徒で夏以降の伸び率が急上昇し、最後まであきらめず挑戦し実績を残したこととです。このことは、部活動で培った根気強さや勝利に向かう中で得我慢がきいた例で、受験はまさに体力であり、結果を出す一つの条件であることを証明しました。

卒業生並びに担当の先生方の三年間の高校生活の取り組みに改めて敬意を表するところであります。

なお、現役合格者が九十%を超えていることもあわせ入学した生徒の学力と才能をさらに伸ばせる学校であると地域から高い評価をいただいています。

日常的には「学習と生徒指導が生徒育成の両輪」であるという考えのもと、生徒と教師が共に学び続ける意欲、教師が気力に溢れ、生徒を引っ張るリーダーシップが必要であります。

二十二年度は校務分掌として学習指導部を新設しました。教務部と進路指導部の業務を一部委譲し、各教科・各学年ごとに独自に行われていた学習指導方法を、全体的な視点からバランスよく計画すること、不振者の指導、部活動との両立を支援することなどを目的としています。

また、『館一スタンダード』を作成し、「理念的目標」・「数値目標」・「指導体制の確立(強力な進路指導体制づくり・人間形成を目指す指導・更なる指導力向上と教師集団のまとまりを追求)」など、本校の目指すところを明確に示し、全校あげて取り組んでいます。

さらに、今後の生徒減少期において、将来、募集定員(一学年七学級二八〇名)や進路実績を維持することが大変困難な状況になることが予想されます。今後、積極的な広報活動や本校独自の教育環境の整備が必要であると考えます。

個に応じた進路指導を推進することは言うまでもないことですが、生徒の学力的的確な分析と国公立大学の量的な維持拡大と難関大学に挑戦する学力を養うことは本校の永遠のテーマであると考えます。

さて、定時制課程は平成二十二年度末をもって六十三年の歴史に幕が下ろされ閉課程になります。そこで、定時制の歩みを振り返ってみたいと思います。

本校は戦後の学制改革により昭和二十三年四月に高等学校に転換され、校名も「茨城県立下館高等学校」となりました。この年に定時制課程(夜間三〇〇人)が開設されました。さらに昭和二十四年四月に「茨城県立下館第一高等学校」と、現在の校名に改めるとともに定時制課程に昼間部が設置され、昼夜二部制の募集形態をとりました。これにともない生徒定員も四〇〇人になりました。しかし、定時制昼間部は長くは続かず、昭和三十年度定時制昼間部募集停止となりましたので、昭和三十二年まで昼夜二部制が九年間続いたこととなります。昭和三十三年より今と同じ夜間部だけの定時制となり、現在に至っています。昭和三十二年度には、生徒在籍数三十三名と増加し、昭和四十六年度三一七名までの十五年度間は三〇〇名前後の在籍数を誇っていました。最も多い在籍数は、昭和四十年年度の三七三人でありました。昭和四十九年度に定時制定員一六〇名になりました。以後少しずつ生徒数が減少し、平成十九年度は、在籍数六十五名となり、平成十八年二月、県教育委員会が発表した県立高等学校再編整備の後期実施計画により、平成二十年度に定時制は募集停止に至りました。

平成二十二年度定時制最後の生徒となる四年生は十三名(男子九名・女子四名)です。定時制卒業生の総数は平成二十三年三月で二、二一〇名であります。

ここで定時制六十三年の歴史の栄光の軌跡についてその一部を紹介します。

一 一定通体育大会
(一) 昭和四十年・第一回

- 三校（本校・下妻一・古河一）
 對抗定時制大会・総合優勝
 （二）昭和四十三年度・第一回全国高校定通卓球大会・県代表として男女五名ずつ出場・男子は全国優勝する。
 （三）昭和五十四年度・全国高校定通バレーボール大会・男子全国ベスト8
 （四）平成二十一年度全国高校定通ソフトテニス大会・女子団体第三位
 二 定時制弁論大会
 （一）昭和二十六年度・第一回定時制校内弁論大会及び第一回定時制体育祭が開催される。
 （二）昭和二十九年度・昭和四十九年度・県下高校弁論大会・団体優勝
 （三）昭和三十一年度・関東弁論大会・団体優勝
 （四）昭和三十四年度・全国高校弁論大会・個人の部優勝

- （一）平成十三年度・長塚節文学賞で学校奨励賞。全日本短歌大会で毎日新聞社賞を受賞。
 （二）平成十七年度・第八回俳句甲子園全国高等学校俳句選手権大会・団体の部準優勝
 （三）平成十九年度・第二回全国高校生短歌大会・団体の部準優勝
 五 「学窓」について
 昭和二十五年定時制夜間部の総合機関誌「学窓」が発刊されました。昭和二十七年までに十二号が発刊されました。定時制閉課程になる本年度九十七号をもって最終号となります。
 定時制六十三年の間、生徒が「学窓」に結集して受け継ぎ書き綴ってきた青春の群像の記録であり、本校の定時制の歴史そのものであると言えます。

別の味がすると、学校生活の中で大きな楽しみを生徒に与え続けてきました。
 定時制は閉課程になろうともこうした数々の栄光は本校の歴史に永遠に刻まれることになるでしょう。
 学校は言つまでもなく、学力の向上と豊かな人間性の育成を普遍のテーマとして、「知・徳・体」のバランスのとれた質の高い教育を目指すものであります。更なる発展を願ひ最後まで学校運営に全力であたる所存でありますので、紫西同窓会員の皆様方のご支援をお願い申し上げます。

定時制の近況報告

定時制教頭 袖山 博

（五十二回卒）



生徒達です。そのような生徒達に触れ、これから始まる私自身の新しい環境での学校生活に、期待感が湧いてくるのを感じました。

私は、本年度本校定時制教頭に着任しました。昨年度まで、全日制において教諭として七年間在職しており、本校での生活も八年目となります。四月当初から午後四時半ごろになると、「おはようございます。」と職員室に生徒達が次から次へと入ってきます。とても人なつこく、穏やかな

成を普遍のテーマとして、「知・徳・体」のバランスのとれた質の高い教育を目指すものであります。更なる発展を願ひ最後まで学校運営に全力であたる所存でありますので、紫西同窓会員の皆様方のご支援をお願い申し上げます。
 本校定時制課程は、本年度三月を以て閉課程となります。終戦直後、昭和二十三年に開設されましたが、茨城県高等学校再編整備計画により、定時制六十回の卒業生十三名を本年度送りだすのを最後に、六十三年の歴史に幕を閉じます。社会状況の変化に伴い、経済的に恵まれない中で、向学心に燃える勤労青年のための定時制の役割から、いろいろな理由により、高校に通えなかった者の再出発の場としての定時制へと、その役割は変化してきたといえます。
 四月、定時制について六十三年の歩みを詳しく調べることから始めようと思いましたが、まず、開校間もない昭和二十五年より発刊された、夜間部の総合機関誌「学窓」から調べることにしました。この当時の「学窓」は、すべてひとつひとつ手書きで、枚数も何ページにもわたった大作であり、当時の生徒達のエネルギーが伝わってくるのを感じました。いろいろな定時制に

関する資料を読み進める中で、定時制六十三年の歴史の重みを強く感じました。
 本年度は、生徒の人数が少ない中、一年間を有意義なものとするため、毎日の打合せの時間はもちろんのこと、授業が終わった後もいろいろなことについて話し合いました。本来なら、スポーツレクリエーションだった春季、秋季レクリエーションも「手作りうどん・餃子」や十数年ぶりに実施した「ディズニー・シー遠足」と姿を変えて、生徒が十分に満足できる行事になるように努めました。
 「手作りうどん・餃子」の実施に当たっては、調理員の皆さんや技術員さんの協力がありました。全職員の協力があった成功することができたと思います。うどん粉を手でこね、麵棒で伸ばすことから行いましたが、生徒のみならず我々教職員も一緒に楽しみ、笑顔が絶えませんでした。
 遠足の実施に当たっては、早朝に学校に集合するということ、定時制の生徒にとっては非常に大変なことです。生徒達の多くが仕事を持っており、遅くまで働いている生

徒もいるため、昼間は熟睡している生徒もいます。

行きのバスの中ではその疲れも見せず、元気にはしゃぎ笑いが絶えませんが、さすがに帰りのバスの中では、寝息があらうこちらで聞こえていました。

この一年間、新しい試みをし、驚きと笑いの絶えない微笑ましい学校生活にしようと全職員で活動してきました。各行事が終わるたびに、刻一刻と閉課程に向かって、時間が過ぎていくのを感じました。

進路実現は、四年生にとっての最大の課題であり、「全員が決まるまで」をスローガンに、全職員が一丸となって指導に当たってきました。し



かし、日本経済は過去に経験のない不況を体験しています。

秋の時点での本県高校生の就職内定率も、非常に低迷しています。本校定時制の就職活動もそうした困難の中にあり、この困難と葛藤してきました。

就職試験や進学試験に生徒・教師が団結して取り組んでおり、年度内にスローガンを達成できるよう努力しています。本年度の生徒の活躍のうち表彰を受けたものを紹介します。

○第八回私の主張「わがまち筑西語るべの集い」

最優秀受賞

題名「ボランティアと古

希路の高校生」

○第二十一回上田三四三記念

「兵庫県小野市短歌フォーラム優秀受賞

「おはようとおやすみ挨拶定

時制夕日さしこむ教室の窓」

○平成二十二年茨城県高等学校

学校定時制通信制生徒生活体

験発表大会

茨城放送社長賞受賞

「古希路の高校生」

さらに、第十三回長塚節文

学賞短歌・俳句の部入選、第

二十五回国民文化祭・おかや

ま二〇一〇文芸祭短歌の部入

選、第五回桜川市市民文化祭俳句大会入選、高等学校定時制通信制教育振興会表彰等沢山の表彰を受けました。

最後に、昭和四十二年に完全給食が始まって以来、定時制を支え続けてくれた学校給食の調理員さんに感謝を込めて、生徒の短歌を一つ紹介し、近況報告の結びとします。「給食へ向かう途中の長廊下小走りとなるカレーの匂い」

定時制

代表の言葉

駆ける

四年 橋本 歩

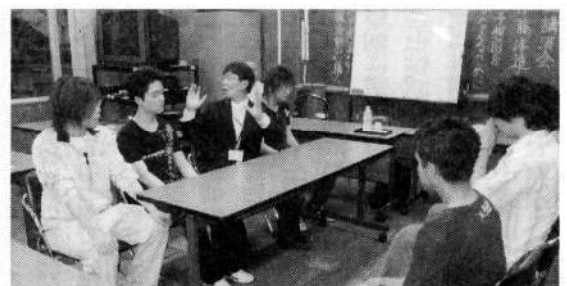
四年前の「僕」と現在の「私」、随分と変わった、変わった何てものではない「変貌」といってもいい。四年前、周りに勧められ「とりあえず」校門をくぐった私は高校に意義や価値などを見いだせなかった。母に「嫌だったら辞めても良いから」と言われていたので、直ぐにでも辞めようと思った。私自身の情弱さを棚に上げ、何の努力もしないまま、唯、行きたくないとの理由で、ここまで言っていてや

めなかったのは多分、世間の目を気にしていたからだろう。中学を卒業し高校にも行かずバイトもしていない、そんな目で見られるのが嫌だったから通っているだけだった。

しかし、定時制に通う内に徐々に自分自身が変わっていくのを感じた。元々、橋本歩なる人物は、いくじなしで、めんどくさがり、我が儘と三拍子揃ったどうしようも無い奴だったのだ。「だったのだ」と書いているが自負が過ぎる。今でも根本の部分は変わらないままである。だが確

かに変わった。友達も出来、夕日背に校門くぐり、授業に励み、給食を食べ、星空の下、下校する。なんて事ない平凡で当たり前の日常が、とても輝いて見えた。定時制に通っていて良かったと、辞めなくて良かったと心から思う。

改めて振り返ってみると、私にとって「定時制」には大きく分けて二つの意味がある事に気付いた。一つは「成長の場」である。様々な人と共に学び、触れあう内に変化していく人生観と価値観、私が如何に子供かを思い知ったし、



知らされた。これから先、人生という長い長い坂道を歩んで行く為の「コツ」も教えてもらった。

二つめは「青春」。中学校を行っていたなかった私にとっては眩しく、又、憧れていたものだ。言葉にするのは恥ずかしいが、一番しっくりきたので書いておく。将に定時制の四年間という「青春」を駆け抜けて来たのである。無論一人ではない、みんなと共に、だ。これ程誇らしい事はない。これらを糧に私は定時制を卒業して行くと思う。最後にこの四年間に対し「定時制言葉を変えた青春を全速力で駆け抜けていく」